

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	松田 聡
論文題目	家持歌日記の研究
審査要旨	<p>現存最古の和歌集である万葉集（全二十巻）の末四巻は、大伴家持の歌日記の様相を呈することはよく知られている。その末四巻を「家持歌日記」と呼ぶとすると、それはいかにして歌日記たりえているのか、そしてそのような部分が万葉集の末四巻に取り込まれていることを、歌集・万葉集としてどう考えるかという問題意識によって貫かれた研究である。</p> <p>全体は三部から構成されている。</p> <p>第一部は、家持歌の解釈をとおして、末四巻に底流する主要テーマを指摘する。第一章と第二章はいずれも「四月のホトトギス」を話題にする詠をめぐる考察であるが、第一章では、越中赴任によって家持が暦法意識を深めたことを指摘し、かつその意識の原点はすでに巻八の家持詠にもきざしていたことを読ませるような、編纂上の配慮が成されていると分析する。また第二章では、「四月のホトトギス」主題の原点は書持と家持の贈答（3909～3913）に認められると指摘する。第三章では、季節の風物を話題に交友の情を尽す場面として饞宴を重視する中国六朝以来の発想は、万葉集では大伴旅人関係歌に多少見えるほかは末四巻に集中し、これは家持の漢風の交友観への志向と、みずからの作歌活動が旅人のそれを継承するものと位置づけようとする意識の表れであるとする。第四章では、家持の長歌体の宮廷讃歌をとりあげ、そこに君臣の交歓を理想視する家持の和歌観を見る。第五章は第三章で見た交友への志向の具体的な表れとして、歌語「鶯」「竹」に注目し、所謂「春愁三首」は交友を象徴する「鶯」「竹」を詠みつつ、友の不在によって誘発される悲愁を表現したものと捉える。第六章は、第四章で指摘した君臣交歓へのあこがれの具体的な表れとして「陳私拙懷歌」をとりあげ分析する。補論には、歌日記以前の「亡妾悲傷歌群」にも、すでに歌日記的手法の先駆けが認められることを指摘する。</p> <p>第二部は、末四巻に見える「伝聞歌」について考察する。「伝聞歌」に注目する前提には、家持と一見関係が認められず、載録の事情が不明な作が存在することをどう考えるかは、末四巻を家持の歌日記と捉える際に大きな課題となる、との問題意識がある。取り上げられる話題は、第二章は歌語「梅柳」の系譜、第三章は中国の題壁詩・駅の詩文の受容、第四章は防人歌といった具合に、さまざまであるが、それら「伝聞歌」によっても、末四巻がそれ以前の万葉集本文に記された和歌の歴史（特に家持の父・旅人を中心とする筑紫歌壇）に連なるものであることを主張したり、家持がその時点での自身の心情や関心の所在を語ろうとしたりしていることを、明らかにしている。そのような「伝聞歌」についての松田氏の総合的な理解は、第一章に示されている。なお、第四章の関連で、防人歌に関する補論二篇では、防人歌に響き合うかたちで三様の長歌を創出して行く家持の姿に、伝聞歌＝防人歌が家持の生と深くかかわるものであったことと、そしてその防人歌収集には、諸国朝集使の関与が想定できることとを指摘する。</p>

第三部は、末四巻の題詞・左注を取り上げる。第一章は、作者名が記されない作について論じ、それは特に家持の「個」に収斂する作品に限られることを指摘する。以降の四章では、「依興」「予作」「追和」「述懐」「拙懐」「未奏」といった特徴的な特定の語を取り上げて、その性格を論じる。中でも「依興」という語は、家持の作歌活動を論じる際のキーワードと考えられ、これまでも様々な論じられながら、すべての用例をカバーする明快な定義がなかったが、末四巻の作品の配列から説明する松田氏の分析は、はじめて全用例に適用できる説明に成功したものとして高く評価することができ、この学位請求論文の中でももっとも注目される成果の一つかと思われる。その他の各論も含めてこの第三部では、題詞・左注に、いうなれば歌日記の「地の文」としての性格を認め、特定の語を繰り返すことで、编者たる家持が、時に彼以前の表現をも踏まえつつ、作歌する自身の軌跡を効果的に語ろうとしていると分析する。

最後の結語において、以上の諸論考によって導かれた、「万葉集末四巻をどう捉えるか」という問題に対する、松田氏の総括が成される。そこにも述べられるとおり、本論文は、万葉集という編纂物の一部に、現在見るような構成のもとに組み込まれた家持関係歌について、その本文状況からなにがどう読み取れるのかに焦点を当てて分析する。各論は、特定の歌語・語句・発想に焦点を当てつつ、万葉集の全用例はもとより、関係が想定される同時代他文献や、漢籍等まで目を配りつつ、網羅的に比較検討することを通して行わた結果に基づき主張がなされ、明快で説得力に富む。その各論の積み重ねによって、万葉集の最終编者たる家持は、自らを「和歌史」を継承する者として万葉集に提示しようとしていたと捉える。妥当な結論で、「家持歌日記」の本質を明らかにした優れた研究であると評価できる。博士（文学）の学位に相応しい論文であることを、審査委員会の総意として認定するものである。

公開審査会開催日	2016年 6月 20日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高松 寿夫	日本上代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	松本 直樹	日本上代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学社会科学学術院・教授	内藤 明	日本上代文学 近現代短歌	
審査委員				
審査委員				